

「病院看護新時代。」の部長級看護管理者の新しい役割  
地域包括ケアのコンピテンシーモデルの実践

○中西京子（水府病院）

【目的】昨今の医療制度改革で「病院看護」を取り巻く環境が大きく変化し、理想とされる看護師像や看護師に求められる資質もまた大きく変わろうとしている。こうした状況の中、看護管理者の果たすべき役割がますます大きくならざるをえないことはいうまでもない。本研究は、近年医療、看護界で対応が本格化する「地域包括ケア」を取り上げ、新時代の看護管理者、とくに部長級看護管理者の新しい役割を問う。【方法】今日の医療制度理解の最重要キーワードである「地域に根差した医療」という古くて新しい概念から地域包括ケアの本質を読み解き、部長級管理者にふさわしいコンピテンシーを抽出し、そのモデル化を試みた。なお、2015年度日本看護協会地域包括ケア推進モデル事業「看護が医療と介護をつなぐ」の枠内で、当院が所在する茨城県看護協会水戸地区にて上記モデルの事例展開を行ったので併せてご報告する。【結果】地域包括ケアの構築と推進では「病院力を、地域力に。」という標語で最もよく表現される戦略的思考が強く求められ、2つのプロセスに主体的に参画していく必要がある。一つは、国民皆保険に象徴される医療の社会インフラとしての性格から、医療を支えるすべての人たちが職域を超えて連携する、いわゆる「医療人の英知糾合」を実現し、健康な人たちを含めたすべての地域住民と向かい合う関係が生み出されていく過程である。もうひとつはこの、連携した医療人と地域住民とが「医療には国境がある！」「医療資源には限界がある！」という考えを共有しつつ社会的協働を進めていく過程であり、そこでは、クリニカルパスに「患者用」があるのと同じく、医療資源の現状把握のための「地域住民用」の地域包括ケアポートフォリオの策定が鍵となる。【考察】「コミュニティー」の価値の再発見で今後、看護実践や看護管理モデルの見直しが必要になるかもしれない。